

Concert de musique baroque et contemporaine

GÉRARD POULET

«Maestro Gérard Poulet et ses amis japonais ;
Yori Kawashima, Yuko Mori, Fumiko Kaneko et Seiji Okamoto»
celebrent la musique contemporaine et intemporelle
française et italienne

Nuit Blanche Kyoto 2015 : Thème « La Mode »

ニュー・ブランシュ Kyoto 2015 : テーマ « モード »

« Jumelage de 50 ans entre Kyoto et Firenze »

« 京都市フィレンツェ市姉妹都市締結50周年記念 »

Gérard Poulet 『スペシャル祝祭コンサート』

«マエストロ Gérard Poulet と日本の友人たち
川島余里、森悠子、金子文子、岡本誠司とともに»

Un événement, mis en scène et en « Mode », en deux parties
qui se jouent des frontières :

K
Y N U
B O I
L T O T
A E
N C H

2015年10月3日(土) 19:00開演
(開場18:30)

聖ヴィアートル北白川教会・大聖堂

St. Viator, Kitashirakawa Catholic church
(左京区北白川西蔦町22 / <http://www.stviator-kcc.org>)

ニュー・ブランシュ Kyoto 2015 : テーマ « モード » 『スペシャル祝祭コンサート&オープン・ハウス』

Deux événements : musique & architecture-design, mis en scène et en « Mode », en deux espaces

主催企画:金子文子(一級建築士事務所CRC 代表取締役)

ニュー・ブランシュKyoto2015

Thème 2015 : La Mode 2015年テーマ : モード

«Jumelage de 50 ans entre Kyoto et Firenze»
—京都市フィレンツェ市姉妹都市締結50周年記念—
フランスバロック・イタリア音楽の
«言葉のレトリック»による音楽性で現代-古典の領域
を超えたコンテンポラリーを表現する

フランスとイタリアの現代曲と時空, カテゴリーを超越する 京都市フィレンツェ市姉妹都市締結50周年記念都市にふさわしい壮大な «祝祭コンサート»

第1部:ジェラルール・プーレが京都-フィレンツェ姉妹都市50周年を祝して選択

ヴィヴァルディ« 四季全曲—春-夏-秋-冬 »

コンテンポラリーがテーマの« ニュー・ブランシュ »で大巨匠が、この古典でありながら、現代曲に勝るとも劣らない難曲に、総数14名の弦楽器オーケストラで挑む。また、ヴィヴァルディが四季を作曲するインスピレーション源となったソネットを金子文子が日本語で朗読する。

ヴァイオリン・ソロ:ジェラルール・プーレ

オーケストラ:くらしき作陽弦楽合奏団(音楽監督:森悠子)

チェンバロ:川島余里

ソネット朗読パフォーマンス:金子文子

第2部:フランス・イタリア 二曲のコンテンポラリー作品

セクンエツァVIII

1958~2002に掛けて全てソロ楽器のために書かれた14の作品の一つ、ヴァイオリンのための作品。ベリオはここで独奏楽器の一つひとつ(フルート、ピアノ、クラリネット、オーボエ、チェロ等々)の特性と可能性の限界に挑戦する作品を仕上げ、彼のライフワークと評される。

この難曲に昨年、バツハゆかりのライブチツヒでのJ.S.BACH国際ヴァイオリンコンクールで、日本人否アジア圏で初めてグランプリにかがやき、日本中の話題をさらった若きヴァオリンニスト岡本誠司が挑戦する。

ベリオはこの作品を詩人ジェノワ・エドアルノとのコラボレーションで作曲。

今回は姉妹都市50周年を記念し、その詩を金子文子(日本語訳)が朗読し「音楽に於ける言葉のレトリック」の関係性を表現する。

作曲:Luciano Berio(1925-2003)

ヴァイオリン:岡本誠司

詩朗読パフォーマンス:金子文子

ラタント:ヴァイオリンソナタ OPUS 20

フランスの著名なチェリストDominique de Williencourtが、ジェラルール・プーレと共にロシア演奏旅行中、ボルガ川の船中で彼が弾く、ドビュッシーのヴァイオリン・ソナタに触発されて、着想しマエストロ・ジェラルールに献呈した作品の世界初演。

ちなみにジェラルールの父ガストン・プーレは、1916年パリのサル・ガヴォでドビュッシー自身のピアノによるヴァイオリンソナタ初演コンサートに、若年25才のヴァイオリニストとして共演し成功を収めた。

作曲: Dominique de Williencourt : 著名なチェリストの世界初演作品

ヴァイオリン:ジェラルール・プーレ

ピアノ:川島余里

出演者ご紹介



ジェラルド・プーレ：現役の巨匠。18歳でパガニーニコンクール優勝。パリ国立高等音楽院を2003年に退官後、パリ市立音楽院とエコール・ノルマルで教鞭を執り、2005年～2009年に東京芸術大学の客員教授。2010年から現在は昭和音楽大学で教授を務め日本の音楽レベルの質の向上に貢献。多数のマスタークラス、主要な国際コンクールの審査員に招聘。1995年にフランス芸術文化章 及び1999年に文化功労賞を受賞。フランスの珍宝と呼ばれ世界中でのコンサートや国際コンクールに。最近ではドイツライブチヒ『バッハコンクール』で審査委員長を務め、NHKニュースで、一躍日本中を湧かせた彼のコメントは記憶に新しい。

www.gerard-poulet.com



森 悠子：桐朋学園大学卒業後、齋藤秀雄教授の助手を務めたのち、旧チェコスロバキア、フランスに留学。72年パイヤール室内管弦楽団入団。77～87年フランス国立新放送管弦楽団に在籍。88～96年リヨン国立高等音楽院助教授。90年、京都フランス音楽アカデミー創設。97年、長岡京室内アンサンブル設立。99～2004年ルーズベルト大学シカゴ芸術大学音楽院教授。フランス政府より芸術文化勲章シュヴァリエ章、オフィシエ章授与。09年より、くらしき作陽大学音楽学部教授。著書に「ヴァイオリニスト空に飛びたくて」（春秋社）がある。



川島余里：藝大附属高校及び東京芸術大学作曲科卒業、同大学院修了。在学中にピュイグ＝ロジェに師事し、1989年に渡仏。パリ市立音楽院ピアノ科とピアノ伴奏科のプルミエ・プリを獲得。ギャルドン、ジョワ＝デュティエールに師事。パリ・ロンティポー国際コンクールの公式伴奏者。パリ国立高等音楽院を始め5校で伴奏者を務める。在仏16年を経て2005年帰国。2005年大阪吹田音楽コンクール作曲部門にて「ヴァイオリンのための組曲」で第1位を受賞。東京芸術大学及び昭和音楽大学の非常勤講師。第一線の伴奏ピアニスト。ジェラルド・プーレ氏との共演で高く評価されている。



岡本誠司：1994年、千葉県市川市生まれ。東京芸術大学附属音楽高校を経て、東京芸術大学音楽学部第3学年在学中。2014年7月、第19回J.S.バッハ国際コンクールでアジア人初の優勝、併せて聴衆賞も獲得。自然な音楽性とそれを表現する技術が高く評価され、二十歳にして稀にみる円熟を備えたヴァイオリニストだと評される。



くらしき作陽弦楽合奏団：くらしき作陽大学教授 森悠子が指導する弦楽合奏クラスと卒業生による弦楽合奏団。2012年に結成、13年1月の研究発表会でデビュー。年2回開催される学内定期演奏会では常に新しい試みに挑戦している。

メンバー（音楽監督 森 悠子）

Vn:森 悠子、長瀬大観、大和美祈、小野碧子、松崎国生、松本悠子、中平めいこ
Va:岸田謙太郎、細川泉 Vc:柳橋泰志、諸岡拓見 Cb:河本直樹

productrice du concert recit et performance

金子文子：一級建築士事務所シエル・ルージュ・クレアシオン（CRC）代表取締役。主なCRC建築作品：日本基督教団『原宿幼稚園』、伝統の継承と革新をテーマに『原宿教会』（2005）、シュウウエムラ『ウトコディーブシーテラピセンターホテル』室戸岬（2007 Good design award）、『アテネフランセ・100周年記念リニューアルデザイン』御茶ノ水（2013）。2012年から京町家再生プロジェクト『Kyo-Machiya, Mon amour』に取り組み伝統的工法とモデルニテの融合を目指す“Moë fuan”（萌文庵）、“Forêt imaginaire à Gojo”（五条の森の町家）、“Chris’s ART HOUSE”、“Belvedere”（見晴亭－空中茶室“浮遊する見立ての森”）、等竣工。

www.cielrouge.com



本日のプログラム

第1部 : Première partie

アントニオ・ヴィヴァルディ (1678~1741) / 四季 (和声と創意への試み) Op.8 (55分)
Antonio Vivaldi (1678~1741) / « Les Quatre Saisons » Op.8

ジェラルール・プーレが京都-フィレンツェ姉妹都市50周年を祝して選択した

ヴィヴァルディ「四季全曲—春-夏-秋-冬—」

四季を作曲するインスピレーション源となったソネットを金子文子が日本語で朗読する(原語朗読はDiego Pellecchia)。

コンテンポラリーがテーマの「ニュー・ブランシュ」で大巨匠が、この古典でありながら、現代曲に勝るとも劣らない

難曲に、総数12名の弦楽器オーケストラとともに挑む。

『四季』作曲の原点である詩編・ソネットで朗読される演劇性、アート性で2015年「ニュー・ブランシュ」テーマ

「Mode」にそった演出。従来のコンサート、ジャンル、典型的領域をこえたコンテンポラリーな世界をめざす。

バロックから継続するフランス音楽に於ける“言語の重要性”：言葉のレトリックやイタリアのコンメディア・デッラル

テに代表される色彩的音楽がModeをキーワードにコンテンポラリーに視覚化される。

Gérard Poulet a choisi ce morceau considéré très classique pour commémorer le « Jumelage de 50 ans entre Kyoto et Firenze »

« Les Quatre Saisons » de Antonio Vivaldi, précédé de son Sonnet des « Quatre saisons »
interprété en japonais par Fumiko Kaneko et en italien par un interprète.

Le paradoxe se résout artistiquement, théâtralement, par la mise en scène et en Mode qui met en
avant la rhétorique baroque et la contemporanéité de toute oeuvre intemporelle. La poésie,
musique du langage, apporte cette émotion proprement humaine qui n'a pas d'âge.

Cette rendition atypique des « Quatre saisons » nous plonge dans le présent du vécu, hors des
genres, du temps, des frontières. Sa beauté pourra se graver dans la mémoire de chaque
spectateur.

La mise en scène, lorsqu'elle est un vrai regard contemporain, sait nous rendre contemporains de
tout chef d'oeuvre intemporel.

ヴァイオリン・ソロ：ジェラルール・プーレ

弦楽オーケストラ：くらしき作陽弦楽合奏団
(音楽監督-森悠子)

第一ヴァイオリン：森 悠子 長瀬大観 小野碧子
中平めいこ

第二ヴァイオリン：大和美祈 松崎国生 松本悠子

ヴィオラ：岸田謙太郎 細川泉

チェロ：柳橋泰志 諸岡拓見

コントラバス：河本弘樹

チェンバロ：川島余里

ソネット朗読パフォーマンス：金子文子

&イタリア人による原語朗読

衣装デザイン提供：デザイナー菅井英子

Violon Solo : Gérard Poulet

Orchestre des cordes : Yuko Mori et
« Kurashiki Sakuyou string orchestra »

1ers Violons : Yuko Mori Hiroaki Nagase

Midorik Ono Nakahira Meiko

2emes Violons : Minori Yamato Kunio Matsuzaki,
Yuko Matsumoto

Va : Kentaro Kishida Izumi Hosokawa

Vc : Taiji Yanagibashi Takumi Morooka

Cb : Naoki Koumoto

Clavecin : Yori Kawashima

Sonnet - recit : Fumiko Kaneko

dit en version originale par un Italien : Diego Pellecchia

Costume Design : Eiko Sugai DECO JAPAN

休 憩

本日のプログラム

第2部 : Deuxième partie

« イタリア・フランス二曲のコンテンポラリー作品 : *Deux oeuvres contemporaines* »

ルチアーノ・ベリオ (1925~2003) / セクエンツァVIII (15分)

Luciano Berio(1925-2003) / *Sequenza VIII*

ヴァイオリン:岡本誠司

Violon : Seiji Okamoto

詩朗読パフォーマンス:金子文子
&イタリア人による原語朗読

Poème - recit : Fumiko Kaneko
dit en version originale par un Italien : Diego Pellicchia.

1958~2002に掛けて全てソロ楽器のために書かれた14の作品の一つ、ヴァイオリンのための作品。ベリオはここで独奏楽器の一つひとつ(フルート、ピアノ、クラリネット、オーボエ、チェロ等々)の特性と可能性の限界に挑戦する作品を仕上げ、彼のライフワークと評される。

“Sequenza セクエンツァ”という表題は“連続, 連鎖, 順序, 列”を意味するイタリア語であるが、英語に直訳すると“sequence (シーケンス)”、ドイツ語では“Sequenz (ゼクエンツ)”となり、音楽用語的には“短いフレーズの反復による進行”を意味する。どの作品も強固な構造を持つとともに、それぞれの楽器の可能性を最大限に活用し、特殊奏法も織り交ぜられ、超絶技巧を要求される作品となっている。

ヴァイオリンのために書かれた第8番は、初めは単音から始まり、徐々に音の連なりや反復が増してゆき、中程の部分ではあたかも複数の人間によって演奏されているような錯覚に陥らせる効果も計画されている。

ベリオらとともに共同制作をしていたイタリアの詩人エドゥアルド・サンガイネーティはこの第8番のために以下の詩を残している。

- “Ho moltiplicato per te le mie voci, i miei vocaboli, le mie vocalie grido, adesso, che sei il mio vocativo.” : Edoardo Sanguineti

また、彼は一連のセクエンツァの作品群を管弦楽のために拡大化編曲したものを“シュマン Chemins (フランス語で“道”の意)”と名付け、ヴァイオリンのための第8番は“ヴァイオリン、2本のホルンと弦楽合奏のためのコラルール - セクエンツァVIIIによる”としても知られている。

この難曲に昨年、バツハゆかりのライブチツヒでのJ.S.BACH国際ヴァイオリンコンクールで、日本人否アジア圏で初めてのグランプリで日本中の話題をさらった若きヴァイオリニスト岡本誠司が挑戦する。

ベリオはこの作品を詩人エドゥアルド・サンガイネーティとのコラボレーションで作曲。

今回は姉妹都市50周年を記念し、その詩を金子文子(日本語訳)とイタリア人の原語朗読(Diego Pellicchia)でフランス&イタリア伝統の『音楽に於ける言葉のレトリック』の関係性を表現する。

Du compositeur italien Luciano Berio, cette oeuvre pour violon seul est tirée d'un ensemble de quatorze oeuvres composées entre 1958 et 2002. Berio composa cette série virtuose pour instruments solo qui explorent toutes les possibilités de chaque instrument (flûte, piano, clarinette, hautbois, violoncelle...). Luciano Berio, l'un des grands maîtres de la musique contemporaine, collabora avec le poète Gênois Edoardo Sanguinetti dont un poème sera interprété en japonais par Fumiko Kaneko et en sa langue originale par un Italien (Diego Pellicchia).

Sequenza VIII sera interprété par le jeune violoniste Seiji Okamoto, qui a offert une grande joie au peuple Japonais en étant le lauréat du Concours International de J.S.Bach à Leipzig en 2014.

本日のプログラム

第2部 : Deuxième partie

« フランス・イタリア二曲のコンテンポラリー作品 : *Deux oeuvres contemporaines* »

ドミニク・ド・ヴィリアンクール / ラタントOp.20 ヴァイオリン・ソナタ世界初演作品

Dominique de Williencourt / L'Attente (Sonate pour violon et piano) Op.20 (16分)
création mondiale

ヴァイオリン : ジェラルール・プーレ Violon : Gérard Poulet

ピアノ : 川島 余里 Piano : Yori Kawashima

フランスのチェリスト Dominique de Williencourt が、ジェラルール・プーレと共にロシア演奏旅行中、ボルガ川の船中で彼が弾く、ドビュッシーのヴァイオリン・ソナタに触発されて着想し、ドビュッシー没後100年を踏まえてマエストロ・ジェラルールに献呈した作品。ちなみにジェラルールの父ガストン・プーレは、1917年パリのサル・ガヴォーでドビュッシー自身のピアノによるヴァイオリン・ソナタ初演コンサートに、若年25歳のヴィオリニストとして共演し成功を収めた。

今回の《アタント(期待)》はヴァイオリンとピアノのためのソナタで《Nuit Blanche Kyoto 2015》が世界初演となる。“ラタント”のテーマに基づく3楽章のソナタは、第1楽章の中で聞かれる哀愁を帯びた単調な旋律を展開しながら、徐々に簡素なフレーズの中でフランス風に和声付けされる。2楽章は時を、「期待」の時を引き延ばすかのように、パッサカリア(緩やかな3拍子の舞踏)で、レの長い保続音を装飾する。二つのトリオと変奏では、テーマを速めたり遅めたりすることで、激しく、また嘆くように変容しながらテーマとなる旋律が、詩的に不確か、無造作な偶然性に委ねるように変容し反復される。

また《ニューイ ブランシュ》一環として開催される京都でのコンサートに於いて、この作品が初演される意義は深い。長年に亘り日仏の音楽世界のつながりを見事に継続してきたジェラルール・プーレと、川島余里によって演奏されるフランス現代作品の企画は、日本とフランスが築いてきた素晴らしい関係に新たな広がりをもたらすものとなる。

L'Attente, sonate pour violon et piano en création mondiale, de Dominique de Williencourt, compositeur français. Basée sur le thème de l'attente, cette sonate en 3 mouvements développe une mélodie mélancolique que l'on découvre au cours du mouvement et qui trouve sa réalisation dans une phrase simple harmonisée à la française. Pour étirer le temps, le temps de l'attente, la passacaille s'ornement d'une longue pédale de ré. Les 2 trios et les variations reprennent son thème en le métamorphosant, plus rapide, moins vif, furieux, plaintif... de façon poétique et aléatoire.

Cette création mondiale dans le cadre de « La nuit blanche à Kyoto » apportera une dimension inédite à ce projet de représentation de la France à l'étranger. Interprétée par Gérard Poulet et Yori Kawashima, elle incarnera les excellentes relations que le Japon et la France entretiennent depuis de nombreuses années.

メセナの皆様のご紹介ページ

あなた方のご協力なくしては、このように多彩な二つの企画での参加と具現化はあり得ませんでした。

アート・デザイン・モード・言語と建築空間のクロスオーバーな世界を表現する《オープン・ハウス》や音楽と言語、演劇、モードなる表現の世界が一つに融合され、これだけの素晴らしい演奏家たちが馳せ参じ頂いた《祝祭コンサート》もあり得なかったでしょう。

アート・デザイン・モード・建築、音楽、あらゆる分野の革新的な試みを一夜にまとめたコンテンポラリー・イベント《Nuit Blanche Kyoto 2015》が、《千年の都 La Mode》の都、京都で伝統を継承いくための新たな活力と大きな原動力のひとつとなることを願いつつ、ご賛同支援くださった企業のみならず個人のご支援の方々、その他、色々関わってくださったそれぞれの皆様方に、ここからの感謝をささげさせていただきます。ありがとうございました。

長い伝統とあらゆる文化が生活の隅々に息づくゆたかな伝統DNAをお持ちの京都の方々は、《誠にすごい!素晴らしい!》と日々痛感する私でございます。伝統的でありながらも、決してその内だけに止まらない、知とあらゆる新しいものに対する好奇心、ゆたかな情感と個性。正にイギリスの詩人クリス・モズデルを驚嘆させた和歌をコミュニケーション・ツールとした平安の都人(みやこびと)でいられます。

個人的にご協力を頂いた友人たち—マエストロ・ジェラルドと川島余里、世界初演作品に馳せ参じてくれたドミニク、そして岡本誠司くん、森悠子様とその精鋭なる若い音楽家たち、また今年のテーマ“Mode”に相応しい見事な琳派文様なる衣装をご貸与くださるデザイナー菅井英子様、助成下さった(株)リブレ・鹿田淑子様と、個人協賛を頂戴した立松陽子様、また企画の進展を絶えず見守りながら、アドバイザー役に徹して下さった荒牧麻子様、昨年に引き続き、親身に動いて下さった林麻矢様、そして私にこうした素晴らしい機会を与えてくれた英国の詩人、クリス・モズデル、皆様方にここからの御礼を申し上げます。

最後にとても大切な<場>聖堂をコンサート会場に! と、真っ先にこのプログラムの内容に驚嘆しご支援くださいました聖ヴィアートル教会の神父様、評議会のみならず、信者の皆様方。

美しい音楽を奉納させて頂く機会を頂戴した喜びに、ここからの感謝を!

あなた方の静謐な優しいおこころで満ち満ちたお御堂なくしてはこの素晴らしいコンサートの実現はあり得ませんでした。

<ありがとうございました !!!>

《Nuit Blanche Kyoto 2015 - La Mode》

Gérard Poulet「スペシャル祝祭コンサート」&「Chris Mosdell Art House・OPEN HOUSE」

実行委員会企画・代表 Productrice du Concert et Open House : Fumiko KANEKO

ご協力頂きました皆様

協賛メセナ(順不同・敬称略)

株式会社 堀場製作所

株式会社デコ・ジャパン

株式会社タニガワ印刷・谷川勝重

彌榮自動車株式会社

株式会社一保堂茶舗

株式会社リブレ

個人支援の皆様(順不同・敬称略)

立松陽子

バリューアット株式会社・戸田孝行

HORIBA
Explore the future



COROMO ロゴもらう
by DECO SUGAI

株式会社 **タニガワ印刷**

K Y N U
B O I
L O T
A E
N C H


一保堂茶舗
IPPODO TEA CO.

ニュイ・ブランシュ

KYOTO 2015

共 催：京都マンガミュージアム／京都芸術センター／京都市交通局／ヴィラ九条山

特別後援：在日フランス大使館

後 援：外務省／パリ市／在京都仏総領事館／NHK京都放送局

助 成：アンスティチュ パリ本部

オープン・ハウス & 朗読パフォーマンス

クリス・モズデルのアートハウス:モードなる建築デザイン

2015年10月3日(土) 午後5時~午後5時45分

左京区 岡崎 法勝寺町83-1



CHRIS MOSDELL'S ART HOUSE

Designed by Fumiko Kaneko

Fashion "Mode"

Photo: Akiko Fujiwara

京町家リユール建築に携わるアーティスト・デザイナー金子文子による “京町家モナムール”シリーズ最新作”

永観堂に近い岡崎の瓦町家景観ファサード、書院造床の間、美しい木建具、欄間等周囲の景観は変えず一歩玄関に入った途端風景は一変する。伝統美を残存させながら採光豊かに、東山の光景までダイナミックに取り込む大開口。コンテンプラリーな空間コンセプトと大胆なゾーニング&デザインを独特な感性を駆使して融合させる彼女ならではの、細部にまでこだわったデザイン。

幽玄とモード、機能と伝統性、相対する究極を構成するエネルギーと其処からかもし出される陰影に満ちた柔らかに流れるような“気”の世界。

イギリスの詩人クリス・モズデルの為に、愛を込めてデザインした空間で“空間の詩人：Fumiko Kaneko&言葉の詩人：Chris Mosdell”の朗読パフォーマンス。古の京平安貴族のコミュニケーションツールであった和歌からインスパイヤーされたクリスの蜜詩集—“絹の都”（昨年日本で出版12月週間ベストセラー）“男からの呼びかけ”×“女の返歌”で構成された英文和文対訳の詩集を、日英語に仏語を加えて、三カ国語で朗読を行う（仏文訳：Raphael Loison 仏語朗読:Eric Avocat）。

クリス・モズデル：作詞家、詩人。エリック・クラプトン、サラ・ブライマン、坂本龍一、マイケル・ジャクソンと共作詞など多数楽曲の作詞。映画音楽、オペラ、アニメのサウンドトラック東京音楽祭で作詞部門の金賞、ユキ・ハヤシ・ニューカーク詩人賞、コロラド州ボルダー文学祭詩部門で大賞受賞。詩人、谷川俊太郎氏との共著「The Oracles of Distraction」は、夫々母国語で書いた詩に音楽をつけた作品。グラハム・ハンコック氏ベストセラー「神々の指紋」展覧会のサウンドトラックを作曲、ロンドンのドルリーレーン王立劇場にて、ロンドン・シティ・バレエ団が上演した詩劇「アマテラス」の脚本担当。

“Architecture designs fashion”: Open House” at “Chris's Art House”

proposed by Fumiko Kaneko, artist & designer

This is the latest event in the series “Kyo-Machiya Mon Amour” produced by Fumiko Kaneko. This year her renovation project of Kyoto's old traditional houses (kyo-machiya) invites the audience to an Open House at Chris Mosdell “Art House”. Chris Mosdell is a British lyricist/poet whose latest book of poetry, The City That Silk Built is a celebration of the Heian aristocratic form of communication via poetry. The poems come in their masculine and feminine forms: “yobikake”, the written form by the man and “henka”, the reply by the woman.

For this Open House event Chris will perform these poetic messages (with Fumiko reading the Japanese translation) - the poems themselves illuminating complementary aspects: male and female, East and West, and both the modern and Heian era (11th and 12th centuries). Mosdell's poems, similar to Kaneko's design conception, are styles of contemporary media traveling through the traditional: a way to harmonize opposing energies through the musical design of language or the architectural design of space. The poems will be performed in English, Japanese and French. (The French translation by Raphael Loison, read by Eric Avocat.)